

実践 公共施設マネジメント ー進化する手法ー

第10回 施設コンセプトとデザインが重要に

東洋大学客員教授 南 学

■「図書のある空間」に人が集まる

12月号では、「桁違い」の集客を実現した施設について、その検証を行った。

東京都千代田区の区立図書館、佐賀県武雄市図書館、神奈川県大和市のシリウスと中央林間図書館を事例として紹介したが、設置自治体の人口の10倍以上の集客をした「公の施設」は、図書館という概念の施設であるが従来型の公立図書館の概念を大きく超えた施設であった。

12月号で紹介した施設以外でも、岩手県紫波町の「オガール紫波」は、人口3万余の町に立地する複合施設であり、年間90万人の利用者を集めているが、ここでも図書館(情報交流館)に30万人以上の利用者がある(ここの中心施設であるオガールプラザは、株式会社が設置した施設であり、図書館部分は町が床を区分所有として確保している点で、部分的な「公の施設」となっている)。

なぜ、桁違いの集客を実現している公共施設が、図書館機能をベースとしているのか。いくつかの自治体で公共施設の利用状況についての無作為抽出アンケートを実施すると、ほぼ例外なく、図書館が最も利則されている施設であるという結果が出る傾向にある。しかし、公立図書館という存在だけでは、他の施設に対する利用者の「比較優位性」はあっても、利用延べ人数が当該自治体の人口の数倍に及ぶ事例はなかなか見つからない。

まだ、筆者の仮説であり、検証が必要であるが、集客力に優れた「図書館」にとっても、その利用者の大半は、蔵書の閲覧や貸出を目的とするのではなく、快適な滞在環境における学習(個人、グループ)、仕事、休息、交流、イベントを目的としているように見える。つまり、生活や仕事の合間に、くつろげる環境で時間を過ごすことが利用目的ではないかと考えられるのである。我が国における都市部の住宅には、書斎的な空間が確保できているケースが少ないことも、この傾向を説明する要素になるかもしれない。地方における住宅でも、大家族に対応した伝統的家屋には、やはり、書斎的な空間は確保しにくい環境にある。

もちろん、大和市の中央林間図書館は、主要駅に隣接した立地特性から、ネットで予約した本の受け取りや返却を行う利用者が多いし、武雄市図書館では、入館者数の増加率よりも貸出数の伸びが低いと言われつつも借出数は増加しているという状況など、書斎的な空間の提供ということで全て説明できるわけでもない。しかし、図書館的機能やデザインは、多くの人を集めることができるのではないかと。庁舎や集会施設でも、書架と閲覧スペースの設置で集客力を高めることができるかもしれない。

なぜ、多くの利用者が集まるのか、という問いかけは、公共施設の役割を検証するためには、重要である。これまでは、行政が設定した固定的な役割で、施設整備や管理運営が行われてきたが、「縮充」(「拡充」の反対概念は「縮小」であるが、縮小し

ても機能が充実するという積極的な意味を含めた造語)の課題を考えれば、施設再編成の主要な観点として、機能の再構成を考える必要がある。

ここで、札幌市が開設した図書・情報館を紹介することで、施設の目的、管理運営方式の検証を促してみたい。

■「はたらく大人」をターゲットに設定

札幌市図書・情報館が、他の公立図書館と全く違っているのは、図書館機能のコンセプトを「はたらく」ことへの支援として明確にしていることである。千代田区立図書館も、夜間人口(常住人口)の20倍とも言われる昼間人口(在勤と来訪者)を「利用者」として位置づけたが、在住の区民の利用(「子ども室・児童書コーナー」など)も想定していた。在住者の利用を想定することは、住民税を主要財源とする自治体にとって、また、地域住民によって選出される首長と議員による意思決定を基本とする自治体にとって、「絶対要件」であるが、札幌市図書・情報館では、その要件に対するチャレンジが行われたことになる。

そのチャレンジが実現した要因は、札幌市における「図書館ビジョン」にある。平成24年に策定された「第2次札幌市図書館ビジョン」の、施策の方向性の一つとして検討された「将来に渡って持続可能な図書館運営」として、「都心にふさわしい図書館の検討一本と人と文化を結ぶ場として、都心に集う様々な人々に対して、文化・芸術や経済など、幅広い分野について情報面から積極的に支援するとともに、市民が交流する場としての機能の検討を進めていきます。／その際は、都心という場所であることから、他の施設との抜合化が前提になると考えられ、複合する施設の機能や都心の特色を踏まえ、「知の拠点」として、その役割の果たし方を検討していきます。」という図書館運営に対するビジョンであった。

このビジョンの背景には、「市民交流使合施設」計画があった。市の中心部における老朽化した旧市民会館の建替え更新を中心とする再開発事業の検討にあわせて「札幌市文化芸術基本計画」(平成21年)、「都心まちづくり戦略」(平成23年)、「第2次札幌市図書館ビジョン」(平成24年)が策定され、市街地再開発事業の内容との整合のもとに、平成25年5月に、「(仮称)市民交流複合施設整備基本計画」が策定された。

市街地再開発事業なので、放送局とオフィスビルとの合築で、オペラにも対応できる2300席の高機能ホールを軸に、文化芸術交流センターとして、中小のイベントに対応したスタジオなどを設置するプロジェクトとなり、情報発信・交流機能の拠点として札幌市図書・情報館を整備することとなった。

面積としては、約1500㎡と小規模で、しかも1・2階に分かれる制約を活かす方向で検討された図書館機能は、仕事や暮らしに関する図書・情報提供、札幌の魅力発信、知的空間の創出というコンセプトであった。そして、カフェを設置して1階は飲食、2階は飲み物のみ自由という空間を設定した。また、会話(打合せ)ができる図書館として、BGMが流れる環境のなかで、ミーティングルームやグループ予約席(個人予約に対応した席も用意)などを設置、セミナーやトークイベントなども開催できるように、特に1階は、時間が自由に動かせて、各種イベントに対応できるようになっ

ている。



1階はセミナーなどにも使え、
交流機能を持つ



「面だし」配下によって、本を
手に取りたくなるづくり

さらに、面積的に蔵書能力は4万冊程度のため、全面開架として、図書の分類も通常の分類ではなく、「はたらく大人」を対象とした「ワーク」「ライフ」「アート」の3分野テーマ型として、一部の書籍は本の表紙を見せる「面だし」として、書店のディスプレイに近い配架となっている。そして、小説本と児童書をなくし、テーマに対応した先端の図書を集めているために、貸出サービスも行っていない。貸出をすれば、その間は、他の人が閲覧できなくなるため、一般的読書を対象とせず、テーマに則した情報収集、調査研究、交流を軸に据えたのである。また、業界紙を中心に90種の新聞、600種の雑誌に加えて、20以上の有料データベースにもアクセスできるように、「しごと」に対応した情報提供を主軸とした。従来の公立図書館の「常識」を越えた図書館を実現させたのである。

■ インテリアデザインで快適な滞在空間を演出

札幌市の都心部に立地していること、地下通路をつかえば、雪の日でも雨の日でも寒い日でも、JR 札幌駅や地下鉄駅から地下通路を使って直接アクセスできることもあり、また、秀逸なインテリアデザインもあって、札幌市図書・情報館はオープンからの1か月に、入場者数が20万人を超えるという人気となった。その後は半減したとしてもく月に10万人のペースなので、年間利用者は100万人も視野に入ってきている。

「桁違い」の集客力を実現した、千代田区立図書館、武雄市図書館、大和市のシリウスと中央林間図書館、さらに、今回の札幌市図書・情報館での利用実態を観察すると、集客力の「源泉」は、快適な滞在空間(デザイン的に優れたインテリア)、飲食に関する自由度(時間、場所、内容に関する一定の制限も含むが、原則的に自由)、そして、図書(書籍)の存在である。これらの要素を見たときに、一般の公立図書館でも、実現していることが多いと思われる方も多いただろう。ところが、集客力のある図書館と、従来型の図書館では、これらの要素が全く違った価値観のもとで提供されているのである。

まず、インテリアの違いである。近年は、図書館に特化した設計技術者も多くなり、外観、内観ともに専門誌で紹介されるような、個性的で優れたデザインが実現している。しかしながら、その多くでは、「桁違い」の集客は実現していない。筆者の独断だが、外観も書架の配置と利用者の導線などの建物内部も優れたデザイン性を持っている。しかし、一方で、滞在環境のインテリアデザインは、建築設計者の領域でない

めか、十分に考慮されているとは思えない。



デザインにも優れた快適な閲覧席

例えば、閲覧席あるいはカウンターとそれに付随するフロアランプ、デスクランプなどは、一体的なデザインであれば、自宅やオフィスよりも快適さを感じることができ、そこで読書が進み、仕事や宿題の作業能率が上がるという気分になる。さらに、観葉植物や絵画などが飾られる、一部の展示を目的とした書架にデザインの優れたカバーをもった本や小物が置かれていたら、リビングのような印象を持つこともできる。

後に述べる札幌市図書・情報館の事例を除いて、集客力を持つインテリアデザインのもとでは、利用者の大半は、当該図書館の本や資料を利用することなく、自らの資料や本、ノートやパソコンを持ち込み、読書や作業に取り組んでいるのが一般的である。このような実態を見ると、快適な滞在環境を実現している図書館に共通しているのは、蔵書やレファレンスという図書館の基幹的なサービスではなく、快適な読書・作業環境であることに気がつく。そして、「本」はインテリアの一部となっているとも言えるのではないか。これは極端な解釈ではあるが、近年の高級ホテルやマンションでは、ロビー部分に隣接してライブラリースペースが設けられていることが多い。このような傾向を考えると、図書館における「本」の機能を分析、研究する必要もあるのかもしれない。

■ 飲食の機能も積極的に位置づける

次に飲食の機能を検証してみることにする。武雄市図書館におけるコーヒーショップは、図書館内で飲食ができる、コーヒーを飲みながら館内の本を読むことができると大きな話題になった。しかし、館内での飲食は、それよりもはるか以前から実現している。館内の目立たないスペースに飲み物の自動販売機と若干のテーブルと椅子が配置されていたり、小規模の売店や障がい者で運営されている「喫茶店」が設置されて飲食を提供したり図書館に隣接したカフェ・レストランが設置されている事例は少なくない。

では、なぜ、武雄市図書館の事例が注目されたのかと言えば、図書館閲覧スペースの機能の一つとして、目立つ場所にショップが設けられ、館内のほとんどのスペースに、飲み物を持ち込むことが許されたからである。

コーヒーや紅茶などを飲みながら、本を読み、仕事(宿題)に取り組むことは、自宅を離れた空間ではなかなか実現できない。飲食を可能にすることによって、心理的に

も解放感をもつのは、人間の心理であり、結果として快適さを感じる空間が実現できているのではないか。千代田区立図書館が開館された段階では、仕事空間の価値は意識されたが、飲食機能の効果は、伝統的な図書館概念が一部残っていたこともあったためか、実現していなかった。目立たない飲食コーナーの概念の脱皮に大きな影響を与えたのが武雄市図書館であり、以後の図書館の概念にカフェ設置が当然のこととして受け入れられるようになった。大和市の中央林間図書館では、廊下を隔てて、喫茶店との一体化を図るようにもなっている。

飲食機能が「当然」となれば、インテリアデザインに優れた図書館は、自らの資料を持参する仕事の間(宿題)の間、昼寝を含む時間つぶしの場として主に活用され、図書はインテリアの一部として機能することが多くなる傾向もある。図書があることで、落ち着いた知的な雰囲気を感じることもでき、入館料は無料という原則もあって、多くの利用者を集めているのではないだろうか。

しかし、札幌市図書・情報館においては、「面だし」という書店的な配架によって、企画者も予怨しなかった程に、蔵書を手取る姿が目立つという。スタッフによれば、「従来型の図書館は、背表紙のみが見える配架なので、目的をもって本を探す必要があるので、「滞在」を目的とした利用者は、仕事をするか、休むかのどちらかであった。ここでは、書籍の表紙を見せることで、利用者が興味を持つのではないか」とのことであった。

■使われる施設としての図書館機能とは

「使われる施設」を考える際に、図書館機能については、二つの留意点が必要となるのではないだろうか。

一つは、「図書館」というイメージは、多くの利用者を引きつける大きな要素である点である。大型の複合ショッピングセンターには、書店が不可欠だと言われるように、「本」の存在は、読書量が減っていると言われる現在でも、そのカバーや帯によって、その時々々の世相を反映させることもあり、売上はともかくとして、多くのお客を集めるように、抵抗なく、あるいは構えることなく自然に足が向く要素となる。

もう一つは、図書館を評制する際に重視される貸出機能は、特に重視する必要はないということである。札幌市図書・情報館の事例が示すように、貸出をしなくとも、情報とインテリアの機能として、「本」は重要な要素であるし、カバーやテーマを積極的に見せることによって、「読書」を誘引することである。この魅力は、「常連客」を呼び込む要点にもなり得るとも考えられるであろう。

もちろん、歴史的にみれば、アレキサンダー大王やクレオパトラが図書館を重視したと伝えられるように、数千年の人類の知的資産の蓄積と整理、調査研究の拠点となってきた図書館の機能は決して衰えることはなく、その重要性は増している。しかし、公立図書館という概念ができ、主要先進諸国で、国民・市民が日常的にアクセスできる施設となった現代では、図書館機能にも、現代的な解釈を加える必要が出てきたと言えるのではないだろうか。